

六ノ一二三ノ一 貞慶龍華会願文 その一

解説 貞慶は文治四年（一一八五年）から続いている龍華会を更に発展させ、元久元年（二二〇四年）十月十七日、本堂において龍華会を行った。龍華会（龍華三会）は弥勒三会ともいい、五十六億七千万年後に弥勒が人間世界に降りてきて三度の説法で全ての人間を救済するという信仰に基づく説法の法座をいい、弥勒の石像を仰ぎ「香華伎楽の供、啓白呪願の詞、一々の法式、予め（弥勒）の当来を擬」し、その下生を渴仰するものである。

ここに記される弥勒石像を中心とする笠置寺の有様、法会の様子は笠置曼荼羅と相まつて弥勒浄土を擬した当時の笠置寺を彷彿とさせるものがある。

笠置寺縁起にもこの願文が記されているが、おそらく弥勒如来感応抄から引用した可能性が強い。

その一

出典 弥勒如来感応抄 東大寺所蔵

解脱上人御草 花園大学所蔵

原文

原夫笠置寺者古先帝代所草創也其他化人刻彫之縁慈尊感応之徳挙世知識不須復説然則一踏此地之人猶期内院之月常住我山之侶誰隔下生之春但発心之道苟有弘誓利物之門不如兼濟仍広博高大之殿堂令人加財力華幢綵幡之莊嚴令物結其縁莫大之功不凶而成左排経蔵以納一代之聖教右峙塔婆以安數粒之舍利手捧其経卷首戴彼仏骨安庠進宝前互作歩鶏頭城之想渴仰瞻石像皆有詣龍華樹之喜香華伎楽之供啓白呪願之詞一々法式予擬当来号之龍華会永伝馬台風盖令結縁之人知得脱之期所以者何如世尊記我今弟子付弥勒龍華会中得解脱時不択像法末法幸遇一代之化人不嫌有戒無戒苟列四部之數仏語不誤我願何疑于時慈尊告衆可曰汝等知否過去久遠有仏出世号曰釈迦牟尼則是我等本師值彼遺法崇吾形像殊設無遮会普勸有縁人当知今日之大衆即皆往昔之善友当来世々亦復如是付属有寄我深加被芳縁無朽今既来会告已遂説微妙之法聞已速解無生之理設住他方之仏土乘通而飛来設沈悪趣之苦域応期而得脱況以別願本從仏後嗚呼匪石之誠與石像共峙塵沙之徳遍沙界無盡唯願三宝先果一事伏乞冥衆永護我山矣

元久元年十月十七日

沙門貞慶等敬白

娑婆界中	四生受苦	普賢劫間	千仏出世	釈尊今為	一代教主
慈氏即彼	補処大士	仏欲滅度	豫有遺誠	我今弟子	皆付弥勒
後而更待	長夜雖遲	悲而猶喜	昏睡欲覺	爰有勝地	世稱笠置
奇異瑞像	精靈彰眼	誰言刃土	殆超大国	數百餘年	仰鳥瑟月
白雲縱埋	青石無朽	五十億歲	期龍華春	邊彼蘿洞	本有草堂
庭宇相接	瞻礼失便	今課魯般	聊移礎石	広博之構	土木適成
功不輒終	多費人力	志不輕尔	皆投仏界	南有塔廟	北有経蔵
石像左右	宝前嚴麗	舍利是仏	聖教則法	弥勒伽葉	大小僧衆
三宝相並	一時恭敬	以報恩徳	以仰引摂	以無相心	告有縁衆
不只一朝	永伝万代	擬彼下生	称龍華会	低頭挙首	各結来縁
以此勝業	値鵝王世	発心開悟	共至不退	設有別縁	生諸仏国
再帰本土	受慈父化	設依重罪	沈三途苦	必答宿願	列聞法衆
生々世々	有恩有愛	漸々久々	互救互導	能所悉入	普賢願海
自他同到	牟尼覚岸				

元久元年（一二〇四年）十月十七日

読み下し文 内容は難しいが敢えて読み下しを試みた。一例として参考にして欲しい。

原なすめるに、夫れ笠置寺は古く先帝の代に草創する所なり。其の化人刻彫の縁、慈尊感応の徳、世を挙げての知識（知っている内容）にして、すべからず復た説かず。

然れば則ち、一たび此地を踏む人は、猶、内院（兜卒天にある内側の宮殿、弥勒如来が常にここにて法を説くという）の月を期し（兜卒天への上生をまつこと）、我が山に常住する侶、誰か下生（弥勒がこの世に現れること）の春を隔てんや。但し、発心（仏を信じる心をおこすこと）の道、苟しくも弘誓（広く衆生を済度して仏果を得させようとする仏の大慈悲の誓い）に有り。利物（衆生を救うこと）の門、兼濟にしかず。

仍つて、広博高大の殿堂は人をして財力を加えしめ、華幢綵幡の莊嚴（重々しく立派なこと）は、物をして其の縁を結ばしめ、莫大の功、図ずして成る（注一）。

左に経蔵を排（連ねること）し、以つて一代の聖教を納め、右に塔婆を峙たてて、以つて数粒の舍利を安んず。手に其の経巻を捧げ、首に彼（釈迦）の仏骨（舍利）を戴き、安庠（安詳、動作がゆったりとして敵かなさま）として宝前に進み、互に歩みて鶏頭城（ケートウマテイ、鶏頭末。弥勒下生の地。弥勒は鶏頭城に住む婆羅門夫婦を両親に選んで出現するとされる）の想いを作し、（弥勒の下生を）渴仰（あこがれしたう）して（弥勒の）石像を瞻ぐ。皆龍華樹（弥勒は龍華樹のもとで三会の説法を行つて衆生を悟りに導くとされる）の春に詣ずるの喜び有り。

香華（仏に供える香と花）伎楽（舞樂）の供、啓白（法会の趣旨を述べる表白）呪願（呪を唱えて祈願すること）の詞、一々の法式は、豫め（弥勒の）当来を擬す。之を龍華会と号し、永く馬

台の風を伝う。

蓋し結縁せしむ人をして得脱（悟りを開くこと）の期を知らしむ。所以は何ぞ。世尊記するが如く、「我れ今、弟子を弥勒に付し龍華会中に解脱を得さしむ。時に像法（仏滅後、五百年または千年、それ以後を末法とする）末法を扱はず。幸いに一代の化人に遇いて、有戒無戒を嫌わず、苟も四部（四種類の信徒、即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷）の数に列す」と（注二）。仏語（仏の教え）に誤りなし。我が願い（弥勒の下生に値遇し、龍華三会に列すること）何ぞ疑いやあらん。

時に慈尊（弥勒）、衆に告げて曰うべく、「汝等は知るや否や。過去久遠に仏の出世有り、号して釈迦牟尼と曰う。則ち是、我等が本師なり。かの遺法に値い、吾れ形像を崇む。殊に無遮会（男女、貴賤、道俗などの区別なく平等に財施、法施を行う法会）を設け、普く有縁の人に勤む。当に今日の大衆即ち皆往昔の善友なるを知るべし。当来（来世）の世々亦復すことは是の如し。付属（この場合、釈迦が弥勒に教えを伝えることを託する意味）に我れに深く寄せる有り。加ふるに芳縁を被り朽ちること無く、今既に来りて会せり（注二）」と。

（弥勒は）告げ已りて遂に微妙（奥深く知りたい様）の法を説き、（聴衆は）聞き已りて速かに無生の理（万有の根底は不生で、それに基づいて成立した万物もまた不生であるという理法。空に同じ）を解す。設え他方の仏土に住すとも、道に乗じて飛来し、設え悪趣（行為の報いを受けて生まれる迷いの世界）の苦域に沈むとも、期（機会）に応じて得脱（悟りを開くこと）す。況や別願（仏のおこす特別の願い）を以て本とし仏後に従わんや。

嗚呼匪石（節操堅固）の誠、（弥勒）石像と共に塵沙（数の多いことを表す）の徳を峙たせ、遍く沙界（ガンジス河の砂のように無量、無数の世界）に尽くること無し。唯だ願くは三宝先づ一事を果さんことを。

伏して冥衆に乞う、永く我山を護らんことを。敬んで白す。

元久元年（二〇四年）十月十七日 沙門貞慶等敬白

（注二）貞慶は建久九年（一一九八年）十一月に「木瓦葺十三重塔」を建立し、塔の中に仏舍利三粒を納入した。

更にこの龍華会の直前の元久元年十月十五日に新しい礼堂を完成させてその供養が行われたが、この新しい礼堂には雅楽の舞台を規則通りに配置できるよう南側に軒廊を延長して楽所を作り、余裕のできた北側の母屋の一方を経蔵として舞曲の座と聴聞の座を分けた。

この願文にいう「広博高大の殿堂」とはこの礼堂のことであり、「左に経蔵を排し、以って一代の聖教を納め、右に塔婆を峙て、以って数粒の舍利を安んずる」というのはこのことを指している。

（注二）貞慶、弥勒講式に言う。「仏記云。我遣法中、持戒・破戒・有戒・無戒。皆悉付嘱弥勒菩薩。三会之中令得解脱」と。

娑婆界（この世のこと）中の四生（あらゆる生き物）苦を受く。普賢（仏の慈悲の極み）の劫（長い時間）の間、千仏出世し、釈尊、今一代の教主と為る。慈氏（弥勒菩薩）は即ち彼の補処（釈尊に次いで成仏する菩薩）の大士（優れた人）なり。

仏、滅度（釈尊が亡くなること）を欲するとき、予め遺誡（古人が残した教え）有り。「我今、弟子をば皆弥勒に付す。後に更に待て」と。長夜（凡夫が煩惱から逃れられないこと）遅しと雖も悲しみにも猶喜びあり。昏睡の覚めんことを欲す。

爰に勝地（景勝の地）有り、世に笠置と称す。奇異の瑞像に、精霊（神仙）眼を彰す。誰か辺土（釈尊の現れたインドから遠く離れた地）と言うも、殆ど大国を超す。

数百余年、烏瑟（仏の頭のもりあがった部分、この文では弥勒の石像のことか）月を仰ぐ。縦へ白雲埋むといえど青石の朽ちること無く、五十億歳の龍花の春を期す。

彼の蘿（さるおがせ）洞を遶りて、本と草堂有り。庭と宇（やね）相い接し、瞻礼（礼拝）に便を失す。今魯般（春秋時代の魯の国の名工の名、ここでは名工の例え）に課し、聊か礎石を移し、広博（広いこと）の構（構造）とす。土木適成なるも、功輒く終らず。多く人力を費やし、志し軽尔ならずして皆く仏界に投ず。

南に塔廟あり、北に経蔵あり。石像の左右、宝前は嚴麗なり。舍利は是れ仏にして、聖教は則ち法なり。弥勒伽葉、大小の僧衆、三宝相い並びて一時に恭敬し、以って恩徳に報い、以って引撰（仏の導き）を仰ぐ。

無相（一切の執着を離れた境地）の心を以って有縁の衆に告ぐ。只一朝に不ずして、永く万代に伝へ彼の下生に擬し龍花会と称すと。低頭拳首し、各来縁を結び、此の勝業（すぐれた行い）を以て、鵝王（仏のこと）の世に値（仏に会い奉ること）し、発心、開悟せんを。

共に不退（勤行を怠りなく続けること）に至り、設へ別縁（特別な因縁）有りて、諸の仏国に生ずとも、再び本土（本仏の国土）に帰し、慈父の化（導き）を受けん 設へ重罪に依りて三途の苦に沈むとも、必ず宿願に答え、聞法の衆に列さん。

生々世々、恩有り、愛有り。漸々久々、互いに救い、互いに導かん。能く悉入する所は普賢の願海にして、自他同じく牟尼（聖者）の覺（悟りの智慧）岸に到らんことを。

元久元年（一二〇四年）十月十七日